



知って得する、ちょっと差がつく トリビア・コーナー

トリビア研究家 末崎 孝幸

末崎 孝幸氏

1945 年生まれ。1968 年一橋大学商学部卒業、同年日興証券入社。調査部門、資産運用部門などを経て、日興アセットマネジメント執行役員(調査本部長)を務める。2004 年に退職。Facebook 上での氏のトリビア投稿は好評を博している。



ミネルバのふくろう(は黄昏に飛び立つ)

ドイツの哲学者ヘーゲルは『法の哲学』の序文で、『ミネルバのふくろうは黄昏に飛び立つ』という言葉を書いている。

ローマ神話の女神ミネルバは、知恵や技術の神であり、知性の擬人化と見なされていた。学問発祥の地であるギリシャ・アテネには「ミネルバの森」というのがあり、ここにはミネルバの使者であるふくろうが住んでいた。一つの文明、一つの時代が終わる黄昏の時に、女神ミネルバはふくろうを飛ばし、これまでの古い知恵の黄昏から、新しい知恵の世界を生み出していくというわけだ。

今回の世界中を巻き込んだ新型コロナウイルスの禍がある程度収束した先には、新しい知恵と技術でこれまでとは違った形の世界を作り上げていかなければならない。

・写真はふくろうを持つ女神ミネルバ(Wikipedia より)



野口英世はなぜ改名したのか

野口英世の出生名が「清作」ということはよく知られているが、彼はなぜ改名したのだろうか。





長期投資仲間通信「インベストライフ」

野口は21歳のときに坪内逍遙の「当世書生気質」を読んだ。その中に野々口精作という自堕落な生活を送る人物がおり、自分と名前が似ていること(しかも医学生)、また野口自身も借金を繰り返して遊廓などに入り組んでいたことからショックを受け、改名を決意する。恩師の小林(高等小学校時代の教頭)に相談した結果、世にすぐれるという意味の「英世」を与えられた。

とはいえ、戸籍名の変更は簡単にはできない。そこで野口は大胆な行動に出た。別の集落に住んでいた清作という名前の人物に頼み込んで、自分の家近くの別の野口家へ養子に入ってもらい、第二の野口清作を作り出した。そして「同一集落に野口清作という名前の人間が二人いるのは紛らわしい」と主張するという手段により、戸籍名を改名することに成功したのである。

北帰行(旅順高等学校愛唱歌)

北帰行は戦後、歌声喫茶で広まり、昭和36年小林旭、ボニージャックスの歌謡曲として大ヒットしたが、原歌は旧制旅順高等学校の愛唱歌(寮歌)である。ただ、歌謡曲版と寮歌版とでは歌詞、曲ともに少し異なっている。

作者の宇田博は、昭和15年旧制旅順高等学校に一期生として入学した。しかし、昭和16年5月に女性とデートして帰ってきたところを教師に見つかり、性行不良で退学処分となった。そこで彼が、別れの歌として友人たちに残したのが「北帰行」である。同校の正式な寮歌ではないが、広義の寮歌として歌われ続けた。旅順高等学校は日本の敗戦とともに廃校となる。

宇田は内地に戻り、旧制一高、東大を卒業、東京放送(TBS)に入社、常務取締役などを歴任している。

ニュートンのりんごの木は日本にもある

ニュートンが、りんごが木から落ちるのを見て「万有引力の法則」を発見したという話はよく知られている。ニュートンの生家にあつたりんごの木は接ぎ木によって、イギリスだけでなく、アメリカ、ドイツなどに分譲されて育てられている。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

そして日本にもイギリスから昭和39年に小石川植物園(東京都文京区、東大の附属施設の一つ)にその苗木が送られた。ただ、羽田空港に到着した時、その苗木はウイルスに感染していたので、小石川植物園で隔離栽培され、17年後の昭和56年にウイルスに汚染されていない木を作ることに成功した。

現在、ニュートンのりんごの木は小石川植物園の記念樹となっており、さらに全国各地の研究所や学校に接ぎ木に使う穂木で分譲され、「科学の心を育てる記念樹」として親しまれている。



・写真は小石川植物園にあるニュートンのりんごの木

有楽町と数寄屋橋(の由来)

東京都千代田区にある「有楽町」は、江戸時代初期に織田信長の弟で千利休に茶道を学び、利休十哲の一人として有名だった織田有楽斎(うらくさい)の名前に由来している。有楽斎は徳川家康によって、この地と屋敷を与えられたのである。

また、数寄屋橋は江戸城外濠に架けられた橋で、「数寄屋」は「好みに任せて作った家」という意味であり茶室のこと。この付近に織田有楽斎の茶室があったことから数寄屋橋と呼ばれるようになったのである。この付近は現在の銀座 4、5 丁目であり、住所表記はないものの数寄屋橋公園や数寄屋橋交番、数寄屋橋交差点として名前が残っている。